

自然・人間・社会の

知恵と実践のための教材

——モラロジ―研究所編

『テキスト モラロジ―概論』

(二〇〇九年四月) ——

水野 治太郎

1 はじめに——テキスト変遷史の素描

財団法人モラロジ―研究所は、このたび、生涯学習用の『テキスト モラロジ―概論』(以下、単に『概論』と呼称する)(モラロジ―研究所編)を刊行しました。それ以前のテキストは、昭和五八年発行の『モラロジ―概説』(以下、単に『概説』と呼称する)で、二六年間使用されてきました。

振り返って、戦後世代の者にとって、生涯学習のうえで最もなじみのあるテキストといえ、『モラロジ―及び最高道德の概要』(以下、単に『概要』と呼称する)というテキストです。一ヶ月間の講座に使用されました。しか

し、その内容は、昭和五年発行の廣池千九郎口述『新科学モラロジ―及び最高道德の特質』を用字用語中心に編集したもので、戦後の時点での新憲法下での倫理道德の基本的吟味まではなされていなかったといえるでしょう。廣池千九郎の思想・精神が時代を先取りしていて、どんな状況にも説得力をもっており、必ず生き残る内容をもったテキストであるとするつよい信念が背後にあったと考えられます。事実、ほんとうに戦後の混乱期にある人々の心を指導してきたといえます。しかし、昭和四〇年代にはいると、次第に、その論理展開(主として学問の方法に関するもの)および働く人々や一般社会の人權意識の向上に伴い、事例中心に随所に問題点があることが自覚され始めたといえます。筆者も、法学部出身ということもあって、命じられるまま人權問題の観点から、誤解を受けやすい数か所の問題点を提出した記憶があります。

そして、昭和五〇年代にはいると、世界人權宣言や同和教育等による国民の意識向上を背景に、大幅な改訂が必要となり、昭和五〇年代の後半に、『モラロジ―概説』の名称で、内容的にも、モラロジ―を創建した廣池千九郎博士亡き後、はじめての本格的な改訂版となりました。筆者自身も同僚と共に、執筆の役割を担いました。これによって、ほとんど一挙に時代に適応し時代を指導

することを意識した内容となったといえるでしょう。それゆえに、責任の倫理、それも道徳的責任及び社会的責任論が随所で説かれました。このことは、従来のテキストにはなかったことです。責任の倫理は、個人の人格の尊厳が保障されてはじめて要請される道徳的命題であるといえるでしょう。単純に数字だけをあげても、「責任」の語が二〇個所近く登場します。それ以前のテキストに比較すると圧倒的な数字です。背景となる時代は、高度文明社会の欠陥が浮き彫りになってきて、人間自身の空洞化現象が露呈されはじめた時代でした。そこで人間の道徳的責任論が、つぎに人々の社会意識の改善と企業の社会的責任論が説かれ始めました。しかし世界の政治状況は、依然として冷戦構造の中でありました。そうした時代の傾向を受けて、『概説』が書かれたのです。

これに対して、今回のテキスト『概論』は、平成一九年発行の『総合人間学モラロジー概論』を下敷きにして、それを簡便なテキストスタイルに編集し直したものとされていますが、社会一般に理解される倫理道徳のテキストという観点にたつて再編集されました。

『概論』は、基礎編と実践編に分かれます。第一部「基礎編」は、第一章「倫理道徳のめざすもの」、第二章「幸福をもたらす根本」、第三章「道徳共同体をつくる」、第四章「普通道徳から最高道徳へ」の四つの章から成り

立っています。第二部「実践編」は、第五章「自我の没却」、第六章「正義と慈悲」、第七章「義務の先行」、第八章「伝統報恩」、第九章「人心の開発救済」、第一〇章「道徳実行の因果律」から成っています。テキストの全体の組み立ては、これまでの『概説』と大きくは変わってはいないのですが、随所に新しい理論や展開方法に工夫がみられます。その点を中心に以下の三点に絞って内容紹介してみよう。

第一にあげたい点は、生きる意味を問う総合人間学としての構想がみられるという点をあげたいと思います。それには、これまでの特色としてあげられていた道徳実行の効果の証明という視点のもつ弱点を指摘しなければならぬのですが、それは科学の方法論や、人間諸科学の発達の歴史に明らかな点ですので、ここでは詳細は省略します。ただ一点、事実を列挙してもその事実がどんな意味をつくりだし独自の世界を構成するかを明示、あるいは物語る責任が生じるのだということです。道徳の世界やその精神的世界・価値の世界は説明する・語るという作業抜きには成立しないことになるからです。そこに意味探究の人間学が求められるのです。

第二にあげたい点は、公共世界・共同の世界・共生の世界・相互扶助の世界、それを支配する正義の論理、共同の作法としてのケアしケアされる倫理道徳が力説され

ているという点です。これまでは、他者との協働性とか協調性という自覚に欠けているのではと誤解されるような、孤立化した実存的基調になっていたといえますが、それと比較すると大きな前進だといえましょう。

さらに、第三に、環境汚染や地球温暖化・資源枯渇の現代社会の諸課題を包括して、「いのち」の保存・生成・発展のための作法を善となづけ、公共善を支える倫理道徳の議論を展開しています。この点は、現代世界が直面する倫理的課題ですから、説明する必要はないといえましょう。記述するに止めます。その他にも指摘できる特色がいくつもあります。テキスト後半の展開の仕方にもこれまでにない工夫とあたらしい概念、たとえばスピリチュアル・ケアのような用語を導入していますが、ここではそのすべてに言及する紙数の余裕はありません。以下、先の三つの特色、ことに前の二点を中心に述べることにしたいと思います。

2 生きる意味を問う人間学

(1) 精神世界への開眼

本書（新テキスト）が生きる意味を問うことを主題にしているのは、第二章「幸福をもたらす根本」と題する章で明らかです。しかしながら、モラロジーの創建者である廣池千九郎博士の人間への主たる問いは、「幸福を

実現するには高い道徳的精神を累積することだ」とする命題に示されています。つまり『易経』の「善を積むの家には、必ず余慶あり、不善を積むの家には必ず余殃あり」は本書でも引用されていますが、その意味は善を積むと幸福な家運に至ること、不善を積むと不幸な家運に至ると戒めています。ここでの善と不善の意味を、廣池千九郎はむしろ精神作用の善悪に注目したといえるでしょう。その善悪を決める標準は何かといえ、神が万物を慈育するような全体的配慮という大いなる宇宙的作用に一致する精神作用になっているかどうかにある、とされています。

このような「精神世界の発見」に至る事情はつぎの文章から明らかです。

「……いやしくも肉体に害あるものをば極度に節制し、神に対する敬虔無二の信仰を持し、あらゆる点より肉体の保存を図ってきた結果がみぎのとおりでありますから、ここに至っては、百計尽きて寒心に堪えざる状態でありました」（『回顧録』四頁）

この文章からは、百の善行が尽きてあとは精神世界を開くより仕方がないとする心境を窺うことができます。さらに、

「私は若年のころより、好んで儒教、仏教及びキリスト教の經典を耽読しておって、モラロジーにお

ける最高徳の要諦はこれを理論的には体得しておつたれど、これを日常生活に実現する具体的方法は、いまだに十分に理解しておらなかったのであります。……はじめて世界諸聖人の教説を人間の精神作用及び行為に即してこれを実現することの可能性を悟つた……」(前傾書、四頁)

こうした経過を経て世界諸聖人の教えの核心は「慈悲寛大自己反省」の精神にあること。そうした心づかいを実人生のなかで実行した成果が、いかに偉大であるかを実証的に証明することが可能ではないか、との固い信念のうえから多くの材料を収集して、まずは普通道徳実行の効果をついでその論理の上に最高道徳実行の効果といわば予測・推測をまじえて証明しようと試みられたといえます。しかし、質の高い道徳的精神の累積を實際生活のうえでどのように確認し、またその欠如をどのように実証するかとなると、結局はよい結果の出たところには必ず善因が、悪果にはかならず悪因が存在したことを予想することに尽きてしまいがちです。

そもそも人間に関して、精神作用の良し悪しを客観的に議論することはきわめて困難なことです。たとえば、ある人が、我が家は代々女性しか生まれず後継ぎは養子を迎えてきたが、道徳実行の成果で、我が家にも男の子が生まれた、と考えたとしましょう。確かにその家では

男の子が待望されていたことは明らかです。そして結果的に男の子が生まれたことを目出度くありがたく受容していることも事実として確認できます。問題は、自らがそれは自分の道徳的精神累積の成果だと自認することが果たして誰もが認める客観的事実かどうかとなると、そこに価値観が関わり、評価基準の多様性・意味の多様化の問題がからんできます。先の発言も男性主義社会の価値観に依然として拘束されているといわねばなりません。

このことはすでに心理学者の河合隼雄氏が、非行少年の例をとって幾度も説明してきています。つまり非行少年がすべての人に対して暴力を振るったり、悪事を繰り返すのではなく、たとえば、ある人が、「君はどうしてそんなことを繰り返しているのか、小父さんにも分かるように説明してくれないだろうか」という姿勢で関わり、それならとその人には親切な態度をとるといいます。つまり人間に関しては、モノの世界と異なつて対象を突き放して客観的に観るといふ客観的科學は成立せず、相手と深く関わって内面を理解するとか、意味を解釈するとか、という姿勢が大事だというわけです。

人間をめぐる問題の理解に当たっては、主観性・内面性が大事な要件だとする態度は、廣池千九郎博士自身の方法でもあつたといえましょう。たとえば下記の文章は

そのことを明らかにしています。

「……故にその内容には千万無量の意味を含蓄しておるのであります。されば、モラロジーは、一つの科学として他の科学と同じく、ある事実の説明にすぎざれど、ひとたびその意義を体得し躬親ら実行せんとする御方に対しては、その御方の学問・知識・経験及び積徳の深淺にしたがってその味わいが異なってくるのであります」(『道徳科学の論文』一冊目 序一〇二頁)

すなわち従来から、道徳的価値の実践には「意味的世界・精神的世界」の開眼抜きにはあり得なかつたと思われるのですが、実際には、実践・実行の響きは行為の回復をつよく含意し、行為の形式化・意味の空洞化に流れやすさがあつたといえるでしょう。

道徳の実行が「意味」の世界を構成する学問的営みだとすれば、モノの現象を明らかにする実証主義にはなじまず、どうしても意味を多様に物語る手法、意味を探究する学問のあり方、人間学的方法へと転換せざるをえないといえます。つまり人は意味の世界に生きる存在であり、意味を手かがりに現象を認識し、また意味を紡いでいて自己の世界を豊かにする存在でもあるわけです。そこに倫理・道徳実行とは意味を物語化するという歩みと同じことだとする見解が登場するわけです。

(2) 人生を物語化するもの

『概論』二二頁には、

「人の一生とは、いわば自分で物語を書き、実演する歩みと考えることができます。人はだれしも人生を舞台にして、自分なりの人生のストーリー(物語)を描きながら生きていくものです。……人は、自分の人生の物語が完結できないか、それを失うとき、すなわち生きる意味を見失うとき、努力する力を失い、絶望したり、虚無感にとらわれたりするのです」

とあります。このように、人生という旅はその価値や意味を探し求める旅ともいえるでしょう。また世界諸聖人とは、最も精神的な意味体系を人類に教示された教師であるのです。さらに、WHO(世界保健機構)の提示した「スピリチュアル・ペイン」を「全人的苦悩」と理解し、人生の意味を再創造するスピリチュアル・ケアのあり方にも言及しています(一六七―一七一頁)。

二〇世紀中葉から登場してきた人間諸科学の圧倒的な影響の下に、現代の学問の主要な関心事は、道徳的事実を客観的に記述する研究方法というよりは、道徳的な意味を探り、それを物語化することで人間を取り巻く世界を構成し直すという働きに注目しはじめました。事実とい

うものみせる多様な側面に人々が関心を寄せたり、事実を意味豊かに物語ることを人文諸科学の主要な方法と考える時代になり、そこに事実イコール真理の立場が後退しつつあります。

(3) ナラティヴ(語り)重視の医療・教育への転換
医療の世界では、これまでのEBM(エビデンス・ベイスト・メディスン)つまり科学的根拠(データ)に基づく医療のうえに、さらにNBIM(ナラティヴ・ベイスト・メディスン)つまり患者の語る物語に基づく医療の必要性が叫ばれるようになってきました。医師は患者の語りを重視し、病の主体者である患者の語りから治療内容を検討するという時代になりました。ことに慢性病の場合等、データ化された病状よりも、患者の独自の人生を背景とした病状の語りこそが、病気の特徴を映し出しているという考え方に依拠します。医師は患者の物語に耳を傾けて、患者の内面から病状を理解して、より適切な対応を考えるという傾向がでてきました。

するとたとえば、廣池千九郎先生の病も、たんに過去の労苦の結果というにとどまらず、大いなる使命を担って命を削って大仕事を完成させようとする者への神からの試練、あるいは新しい未来を開拓する者の「創造の病」ともいえるのです。

また教育の世界でも、たとえば、臨床教育学で主張さ

れるように、個々の子供たちの主体的な内面世界、意味の世界に踏み込み、思考の枠組みの特色を説明しながら、知識を組み立てる学習姿勢に変換しつつあります。かつて廣池学園を来訪され、故宗武志先生と親交を結ばれた、オランダのマルティヌス・ヤン・ランゲフェルト先生こそ、そうした新しい教育学の創始者でした。筆者はその時、受け入れの責任者でした。先生はセミナーを通じて、臨床教育学の真髄を吐露されたのですが、当時は十分に理解できなかったことを残念に思っています。しかし、先生が提唱された「臨床教育学」の新鮮さはいまも変わっていないように思います。私自身が「臨床人間学」を志向してきたのも、生身の人間を肌で感じられるくらい距離をつめて感受することで、はじめて他者の理解が可能になると感じたからです。

(4) ホモ・パティエンスの人間観

本書には、モラロジーの理論にはこれまで中心的位置を占めることなかった人間観、弱さの人間観が登場します。「生かされている人間」であり「病んで死んでゆく人間」です。六八頁には「最高道德の特質」として「広大な慈悲心を育てる」「精神を育成する」「正義と平和を希求する」「救いの道を教える」「知徳一体を力説する」の後に、第六番目として「弱さを思いやる」が掲げられました。他者の苦・呻きに呼応し共感する姿勢、こ

これは日本皇室の長い歴史を通じて一貫して実践されてこられた病む者・苦しむ人々への深い思いやりの心であり、その前提にはホモ・パティエンス(弱さの人間観)が確認できます。救いということの深い意味や希望を与えることの大切さも、弱さの人間観に依拠するからこそ意味豊かな実践につながります。それに反して、日本では成功と失敗の二つの軸の中で揺れ動いているだけで、底の浅い人間観が人々の心に悪影響を与えていることを示唆しています。

ホモ・パティエンスは、人間が弱い存在であるために、自己の知徳に頼るのではなく、自己の知徳が優れていないために神仏の心に同化しようと努める謙虚さを備えるものです。たとえば、「私はまことに知徳不足の者でありますから、つねにその心身を諸聖人の心によって噛み砕かれ、聖人の心に同化させていただき、その教えのまにまに働かせていただいております」(『道徳科学の論文』第八冊、四一八頁)と述べられています。弱さの人間観は、自分の弱さを知り、謙虚さを備えるがゆえに他者のために神仏に救いを求める人間です。自分の欲求満足のために救いを得ようとするのではなく、他者の苦を取り除き、他者の幸福を実現しようとする人間です。自己完結の閉鎖性を取り除き、弱いがゆえに他者をケアし、共苦共歎の生き方を希求する人間、ここに

最高道徳的人間像が示されています。

(5) 善理論を導入した理由

今回はじめて善理論がモラロジー理論として導入されました。それには三つくらいの理由があげられます。

第一は、幸福という概念は、運・不運という偶然性が入り込むものだとする意見もあり、きわめて主観的なものであるともいわれます。たとえば、英語の happy は happen つまり偶然に生じることと重なっており、また周囲が幸福な人と見ていても、本人がそう思っていないことがあります。それに対して、善は、日本では善心という心の面が重視される主観的内容とされるのですが、西洋諸国では、こういうことは善か悪かという問いにも表現されているように、善とは何かについては、他者と客観的に議論することが可能だと理解されています。そのため、善とは何かを追究する学問が倫理学として結実されており、そこで幸福を議論するならば、幸福をもたらした理由とされる善との関連性を議論する必要があります。あるといえます。

第二の理由は、現代社会は、大勢の飢えに苦しむ人々と豊かで贅沢ができる富裕階層に分かれています。日本人の中にも、豊かさを満喫している人々がいて、お金の力で健康・幸福を得ているために、人々の行動を「幸福実現」だけでは説明困難になってきています(貧富の差

はそのまま長寿・高等教育機関への入学率にもつながっている。従って、幸福よりも生きる意味や価値、生きることそれ自体が問われているといえます。幸福への希求というよりは、幸福であることの意味を問う姿勢、人生の意味を問う姿勢が重視されるのです。昔の人からは贅沢と思われるような、そういう精神構造を多くの人がもっています。さらにいえば、その答えを他者からもらって満足するのではなく、自ら納得する答えを見つけたいとする欲求をもっています。そのため、答えではなく、問いそのものが重視されます。問われているのは、道徳実践の技法を問うハウ・トゥー (How to) ではなく、何が道徳か、何が善かのホワット (What) であり、なぜ (How, Why) そう言えるのかを問い直す姿勢です。一言でいえば、精神の渴きといえるでしょう。そんな心の奥底からの問いに答えるのに、幸福になるから、というのは魅力ある回答ではなくあります。どうしても自らの人生の価値や意味を探究させることが重視されるべきです。こうした時代の要請に応えるモラロジーへの第一歩を今回踏み出した点を評価したいと思います。

第三に、廣池千九郎博士がなにゆえに善の概念を避けたかといえば、実際の生活から離れた善の理論は益なしと考えたことがあげられます。ことにソクラテスの弟

子、プラトンのイデア論に由来する最高善を受容しなかった理由も現実性・実際性重視の姿勢からです。プラトンは、われわれの住む現実の世界を真の現実ではなく、むしろ真の世界の影に当たると説きました。善とそれがもつ美しさへの憧れを描いたといえるからです。

今日、豊かさを実現し思うままに人生を送る人々がいる一方で、人間自身の空洞化、精神の空洞化、幸福の空洞化が叫ばれる時代が到来したといえます。そのような時代の中で、現実が複雑化・多様化し、現実からの逃避がみられ、そこに再び、理想主義的姿勢、すなわち善のイデア論に復帰する考えも登場してきているのでしよう。

廣池博士は実際性・現実性を重視し、日常生活・實際生活に有益な道徳理論を探究する学問を重視されました。それに対して、善の理論は、長い歴史をもち、学派によって見解が異なるために、議論だけで終始してしまつて、実践への意欲を妨げると判断されました。そうした傾向は、今日でも持続しているといえるでしょう。しかし、その実際主義・生活主義にも陰りが見え始めました。効果のある倫理道徳よりも、善の本質を実現するより理想主義的な内容を希求する人々もいます。そこで今後は善の理論が生活に根付き、精神生活の改善・人生の向上につながる必要があると同時に、一方では、善と悪

の標準を柔軟に、かつ多様な内容や状況を織り交せて検討する姿勢の確立も求められます。

3 公共人としての生き方

(1) 公共善

日本では、裁判員制度がまもなく発足し、国民の司法・裁判への理解が求められています。司法権という独占的国家権力の行使に、国民が関与するという画期的な意味をもつ制度の導入です。そこには広い意味での「公民教育」が求められていることが分かります。

本書には、はじめて私的善と公共善を区別して、公共世界の善の実現を提案しています。背景にあるのは、一九九〇年代の中頃から、国家哲学とは別に公共哲学が台頭し、活発な議論を展開しはじめたことがあります。さらに、NPO法が制定され人々のための公的使命を担った活動が法的に認められるようになったことも大きな要因です。そこに倫理的価値として公共善の議論が必要となります。定義らしきものとしては「個人のための善（私的善）」に対して、個人を含めた社会全体のための善（五六頁）とあります。しかし、これはまことに不十分なもので、もっと議論を尽くし、「社会全体」とは何か、さらには、個人の私的善と公共善との相互関係性、地域の人々のために立ち上ることが社会全体の利益にどうつ

ながるとか、あるいはそう思って行動を起こしてもそうならぬケースとか、事例中心に詳細な議論をすすめるのではなくてはなりません。しかし、ようやくにして新しい時代の倫理道徳への踏み込みがなされてきたことを共に喜びたいと思います。

たとえば、拙著『経国済民の学——日本のモラルサイエンス研究ノート』に掲げた公共性の定義は「そこに関わるすべての人々が他者を巻き込んで、共通の目標に向けて、一緒に何かをやろうとするとともに広がる共同責任感覚、自己とはまったく異なる人々のニーズに応えようとする人間的共同世界・共通世界」としました。ここには、一緒に何かをやろうとする社会構成の主體的・自立的責任意識と「つくろう」とする動的な意識と行動を包括しています。テキストの公共性は、すでに出来上がった公共的なものへの感謝・尊敬を強調しているのみで、もっと無から有を創りだす者の倫理的責任を呼びかける必要があります。これまでのモラロジーにおける倫理道徳を議論する基本姿勢は、自然の法則の探究を基本課題とするために、たえず受動的であって、そこに壊れたものを修復するとか、新しく創りだす建設的な姿勢が弱いように思います。社会状況を切り替える強さ・主体的・建設的な姿勢を評価する目を養う必要があると考えます。

(2) 道徳的共同体づくり

他者へのあり方というのには、他者との共生・相互関係の築き方をいいます。それらは倫理道徳の基本となるものですが、そこには多次元の諸問題が包括されます。第三章は、「いのちと社会の交わり」「人類の共生と公共精神」「人類社会の基礎的共同体」「祖国愛と人類愛」等のテーマを掲げ、問題提起しています。

人間を「自然界と社会がつくる公共的なものの海に浮かぶ存在」と位置づけたこの命題に象徴されるように、現代社会の公共性は、個の人格・品性の向上と共に、現代の倫理道徳の根幹に見据えるべき主題となりました。日本の知識人は、戦後、公とは何か、公共性とは何を意味するか議論を避けてきました。戦前の「お国のために命を捧げる」の掛け声に反発するかのようになり、公の哲学的思考を停止してきたといえるでしょう。そのために「私」が肥大化して、「滅私奉公」が転じて「滅公奉私」の私生活中心主義が蔓延してしまいました。公共の私物化が横行するのは当然でした。

しかし、そのために私人同士つながり・相互関係性が消えてしまい、地域の崩壊が始まりました。後期高齢者の「独居老人」「孤独死」もそのような地域の空洞化現象の一コマにすぎません。過去の公共善の復活で解決できる課題と新しい公共善を議論してすすめることも必

要です。

(3) 見知らぬ他者へのケア

本書には家族共同体・地域共同体・国家共同体に限定されていますが、やはり隣国とのつながりや多人種で構成する国際社会での生き方も議論すべきだったと思います。さらにいえば、国家共同体の課題を民間企業・NPOが国家に代わって実施する現代社会にあっては、国家像や国家論の展開も過去の議論とは異なってくることは必至です。公共性の議論はそこで登場してきたものです。そのなかには、見知らぬ他者へのケアの問題があり、公共世界を築く者の責任の倫理が入ります。

こうした諸問題を抱えながらも、本書は、生涯学習テキストとして、公民教育のためのよきテキストになっていると評価できるでしょう。ただ講師がこのテキストを使って、ほんとうに公共教育を推進できるのかという当面の課題も山積しています。

4 いのちの課題——善の継承・成長・譲渡

本書の大きな特色は、人間の安全保障のために、「いのち」をめぐる教育の構想が入ったことです。エコロジ―教育を越える、これを包括するような広い地平から、善の概念を導入して、善すなわちいのちの継承・成長・譲渡を強調しています。しかし、この課題は、エコロジ

―教育と共に、国家主導型の必要な政治的・公共的使命を担ったものですから、当然国をあげて取り組んでゆくべきものとなります。それを倫理道德の課題とするからには、運動の基本となる道德的価値あるいは意味を提案するものでなくてはなりません。モラロジーが提唱する自然の撰理の内容を、広い視点に立ち、総合的に検証してゆく必要があります。しかし、この議論はきわめて今日的課題になってきましたから、これ以上の議論は必要ないと思います。

5 「全体性」「総合性」への視野を開くテキストとして

本書の内容を現代世界の中に位置づけ、その役割と使命を、単にモラロジー理論やその歴史のうえから展望するだけではなく、多様な価値観が併存するこの世界の混沌とした状況からみても、一つの大きな意味が浮かび上がってくるように思います。それは個々の特色・異質性を生かす「全体性」「総合性」「包括性」といった、おおきな「視野」または「地平」ともいえるものです。

第九章の「スピリチュアリティ」についても、そのような広い視野や座標軸へと人々の心をいざなう内容がみえます。スピリチュアル・ケアというのも、そうした地平に立つことで、見えてくる宇宙的展望のことです。宇宙とは一切を包容する視座です。そこに深い安らぎと感

動が導きだされます。そして、スピリチュアル・ペインとは、自分が立つべき広い地平から切りはなされて孤立化している心理状態が心の痛みになっているということです。

そうした個を否定せず、個を生かしてゆく公平無私の正義と慈悲という概念に、自我没却という概念に、伝統という概念に、人心開発救済という概念に、あるいは目には見えない「つながり」「宇宙なもの」を把握する能力とされる「スピリチュアリティ」に、それは一貫して流れているといえます。要約して「全体性」と名付けましょう。

我という個に捉われていては心の眼は開かれなさとされます。しかし逆に個を徹底することが自己を越える大いなる「全体性」に辿りつく道筋かもしれません。道筋は異なっても、「全体性」というゴールは同じ意味と内容を備えます。

さらに前述したように、テキスト全体が「受動性」「従う」「感謝」を強調しすぎていて、「創造性」「能动性」「主体性」を強調しているとはいえません。それは東アジア全体に広がる宗教文化的特色とも一致します。もう少し西洋社会の倫理道德の善さである主体性・積極性を導入し、バランスを保つていように考えます。さらに理論展開の方法にも一言ふれておきましょう。

これまでのテキストが普通道徳（普通道徳が支配する現代社会）から最高道徳（理想原理としての深い精神的道徳）への道筋を同じように辿っていますが、普通道徳を語りながら、そこに最高道徳の精神原理がいわば萌芽として生きているのだとする語り方もあると考えます。原理中心の展開方法（視点）を変えて、状況の中で原理が実際に働いている様を捉えるような論述方法も、実験的にやってみるべきだと思います。

なお一言したい点があります。これだけの教材が出版されたにも関わらず、モラロジー研究所のスタッフの間でも、また地方の会員からもあまり話題にはならず、ほとんど無視されたような状況にみえます。このテキストが何を伝えているのか、テキストの活用方法を具体的に議論することが重要だと考えます。このままでは、単に講座のテキストだけで終わってしまいそうで、関係した人々も不安な気持ちではないでしょうか。私自身が耳にしている声をここで紹介しましょう。「従来のテキストに比較し説かれている内容が柔軟で具体的でやさしさを持っている」「これまでにない心の深みを感じさせる内容がある」「人間のもつ善・価値・弱さを共に包含する大きな視野を感じる」といった内容が届けられています。もつと研究所あげて再確認して、時代の動向に向き合ってもらいたいと切望する次第です。

以上、問題点を指摘するのみに止めますが、それはともかくとしていろいろな意味から、この新しいテキストの誕生を祝したいと思います。本誌の愛読者にもぜひご一読をすすめます。